

【講演会等報告】

トナカイ遊牧民コリヤークのエコロジー：ツンドラの人々は何も捨てないのか？

呉人恵氏 講演会

津 曲 敏 郎

開催日：2010年3月6日（土） 15：20～16：50

開催場所：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W202 教室

講 師：呉人恵氏（富山大学人文学部教授）

主 催：日本文化人類学会北海道地区懇談会・北海道民族学会（共催）

講演者の呉人恵氏はモンゴル語研究からコリヤーク語に転じ、すでに15年以上に渡って、フィールド調査を続けている言語学者である。ツンドラで危機に瀕した言語の話者と向き合うなかで、言語を通して見た、あるいは言語に刻印された、人々の暮らしと世界観にも深い関心を寄せている。昨年刊行された『コリヤーク言語民族誌』（呉人 2009）は、そのような氏の研究スタンスが紡ぎ出した、稀有な民族誌の試みである。今回の講演のテーマもその延長線上に位置づけられるような、フィールドの臨場感あふれる内容であった。



呉人恵氏

はじめに、先行して行われた沼崎一郎氏の講演内容に触れ、文化人類学が今日「公共性」に活路を見出そうとしているならば、危機言語を対象としたフィールド言語学もまた話者コミュニティとの緊密な連携なしには立ち行かないことを述べた。まさに呉人氏の研究は単なる「参与観察」にとどまらない、話者との厚い信頼のうえに築かれており、研究者の側からの「還元」をもみずから実践するものである。その一端については呉人（2003a, 2003b）などからもうかがい知ることができる。

さて「トナカイを余すところなく利用する」と自他ともに認めるコリヤークの人々であるが、実際には「捨てない」側面ばかりではなく、「捨てる」側面もあるという。トナカイの何を捨てずに、何を捨てるのか、そこにどんな動物資源観が見出せるのか、ということを中心に、当日の話が展開された。呉人氏によれば、コリヤークの生業はトナカイ遊牧を主としながら、漁労、狩猟、植物採集など多岐に渡っているが、これは「厳しい自然環境に適応対処するために、複数の生業を組み合わせた多層的な文化を形成」する必要があるからだという。しかし、なかでもトナカイ利用の徹底ぶりは、たとえば蹄や角・頭頂部の各部位に細かい名称が区別され、それぞれに用途があることによっても示される（呉人 2009:178-180 からの抜粋が資料として配布された）。もちろんトナカイ毛皮の加工と利用は、コリヤークにおいて「最も発達した物質文化の一つ」として位置づけられるという。毛皮は、季節に応じた特性によって名称や用途が細分化されるばかりでなく、燻煙や染色の有無などによってリサイクル・システムのなかで衣類や住居として通年利用される。一例として住居の煙で燻された毛皮が春秋（未除毛）または夏（除毛済）の衣類として再利用されることが示された（写真参照）。



ユルト・カバーを再利用した夏のトナカイ皮服（呉人恵氏撮影）

トナカイをめぐる、こうした「捨てない」文化に対して、「捨てる」文化は儀礼やタブーとかかわっている。たとえばトナカイの胃の内容物は食用にされるほか、「ジルクトアトゥヌ」と呼ばれる儀礼の場所に供される。内臓の一部もここに置かれ、その中には完全に摂食タブーとされる部位もある。摂食タブーには食べる人の性別や年代、状態（妊娠中かどうかなど）を限定した「部分的なタブー」もある。実は「完全なタブー」とされるのは食物として重要でない部位であるのに対し、「部分的なタブー」のほうは食物として重要な部位であり、こうした点はモンゴルにおけるヒツジの摂食タブーにも共通して見られるという。ここには遊牧民に共通する動物資源観が反映しており、呉人氏によれば、それは「殺し」の罪悪感を巧妙に回避する

工夫であるとされる。つまり、衣や住の側面では最大限の動物利用が許されるが、食の面は「殺しの罪悪感をより感じやすいために〈捨てる〉タブーを設定する必要がある」というのだ。言い換えれば、「捨てる」ことを正当化するために儀礼やタブーが設定され、しかもそこにしたたかな適応戦略が隠れているということだろう。

このように呉人氏が「捨てる文化」と呼んだものは、一般的に不要なものをただ廃棄するだけの「捨てる」行為とは異なる意味合いを含んでいるようである。ではコリャーク語で「捨てる」にあたる動詞は（多分あるのだろうが）、どのような対象に対してどのような意味合いで使われるのだろうか？ そんなところへ考えを広げさせてくれる点でも、コトバから民族の知恵や世界観に迫ることの可能性を十分に感じさせる内容であった。一方で、そうした古くからの生活やものの見方を反映しているはずのコトバが急速に失われつつある現実がある。そのために言語そのものの記録を急がなければならないが、一人の研究者がやれることには当然限りがある。言語学者としてのそのような葛藤をおそらく抱えながらも、衣食住に渡る生活様式を丹念に追い、さらに心のありようにまで洞察をめぐらしつつ、ツンドラの人々とトータルに向き合う姿勢は、聴衆に強い感銘を与えた。

参考文献

呉人 恵

2003a 『危機言語を救え！ ツンドラで滅びゆく言語と向き合う』大修館書店。

2003b 「フィールドから得るもの、返すもの—コリャーク」津曲敏郎（編著）『北のことはフィールド・ノート：18の言語と文化』91-104, 北海道大学図書刊行会。

2009 『コリャーク言語民族誌』北海道大学出版会。

（つ magari・としろう／北海道大学）